

人を育てる言葉の力





きりっつといて、品がある字

高木葉子さん（36歳）は、現在、ある地方銀行の支店にパートとして勤めています。

十五年前、短大を卒業して入行したこ

ろは、毎日の業務や職場の人間関係のストレスなどから、この仕事は自分に向いていないのではないかと悩んでいました。そんなとき、先輩の佐野みどりさんが、

感謝の言葉、勇気を与える言葉、励ます言葉、幸せを願う言葉、苦しみを和らげる言葉……。私たちは言葉に多くの思いを込めて相手に伝えます。言葉の持つ力は、それを発する人の心によって大きく変わります。

今月号の『ニューモラル』では、言葉の持つ力について考えてみます。





「この書類、あなたが書いたの？ いい字を書くわね。きりつとしていて、品があるわ。こういう字、私、好きよ」と言ってくれたのです。入行して初めて褒められた高木さんは、目の前がぱあっと

明るくなり、それまで上司に叱られたことや失敗したことも一気に吹き飛んでしまいました。そして、また明日からがんばろうという気持ちがふつふつとわいてきたのでした。

「きりつとしていて、品がある。こういう字、私、好きよ」——この佐野さんの言葉は、いつも高木さんの頭の中にあり、思い出すたびにうれしくて、頬がゆるみます。そして、心が沈んだときには、この言葉を思い浮かべ、自分を励ましていました。

そのうち、「そうだ、きりつと一本筋が通っていて、みんなから好かれる人になるろう」と考えるようになりました。字を褒められたことが、彼女の生き方の目標になったのです。



少くも、少くも、少くも

入行して五年たったころ、高木さんは結婚のため退職し、やがて二人の子どもにも恵まれ、育児と家事に専念していました。

下の子どもが小学校に入学すると、以前勤めていた銀行にパートとして再就職することにしました。約十年ぶりの職場復帰で、佐野さんとも再会することができました。

ある日、佐野さんが高木さんの書いた書類を見て、「あらっ、これ、高木さんの字？ ずいぶん変わったわね。ほかの人が書いたと思った」と言ったのです。

驚いて見てみると、確かにその字は雑

然としていて、まとまりがなく、お世辞にもきれいとは言えませんでした。

思えば、この十年、育児と家事に追われてゆつくり字を書く余裕がなく、加えてワープロの普及で手書きをする機会がほとんどなくなっていることに気づきました。

これではいけないと思った高木さんは、近所にある書道教室に通うことにしました。月に二回だけですが、心が落ちつき、静かに自分を見つめる時間が生まれました。

教室の先生は口癖のように、「すぐにう

まくなるコツなんてありません。毎日字を書くとき、なにげなく書かないで、少しきれいに書こう、少し上手に書こうと思って、毎日書いていたらいいんです」と言います。

すぐにうまくなるコツがないのは物足りなく感じましたが、家計簿をつけるときや簡単なメモを取るときも、何気なく書かないで、少しきれいに、少し上手に書こうと心がけました。そして、できるだけ手紙や葉書を書いて、手書きをする機会を増やすよう努めました。

時がたつにつれて、先生の言葉が本当に身にしみるようになりました。意識して「きれいに書こう」と心がけることで、それが習慣となり、昔よりもいい字が書けるようになったと気づいたのです。





心を込めて丁寧に

それと同時に、日ごろの銀行での仕事ぶりを振り返りました。

毎朝、夫と子どもを送り出して急いで家事を済ませ、始業時間ぎりぎりにはすべりこみ、退社時間が近づくと子どものこ



とが気にかかり、そわそわしている。新しい機械に慣れず、仕事が遅くて焦っている。若い人の言動が気になり、おそろしている……。反省することばかりです。

“これでは周りに振り回されているばかりで、まっすぐ仕事に向き合っていない。もつと真剣にひたむきに努力しなければ、せつかく再就職させてもらったのに申し訳ない”と反省しました。

そして、“このような仕事への取り組みが、自分の粗雑な字に表れていたのではないか、佐野さんはこんな私の仕事ぶり

を、遠まわしに指摘してくれたのではないか。さらに、家族に対しても心配をかけているのではないかと考えました。

それからの高木さんは、ふだん何気なく行っていたお茶出し、資料作り、お客さまとの対応に、心を込めて丁寧に取り組むことにしました。おいしいお茶を入れよう、きれいで読みやすい資料を速く

正確に作ろう、お客さまに満足して喜んでいただけるような接し方をしようと、毎日心がけました。

そして、「きりつとしていて、みんなから好かれる人になろう」という若いときの目標を、心の奥底から引っぱり出してきました。なんだか新しく生まれ変わったような気分です。



よいところを見つけ、 素直に伝える

あるとき、高木さんの勤める支店の主催で「資産運用セミナー」が開かれることになりました。一般の人を対象にしたセミナーで、その司会に林伸樹さん（28

歳）が選ばれました。林さんは入行五年目で、高木さんと同じ部署で働く、礼儀正しい青年です。林さんは毎晩遅くまで準備や司会の練習に励んでいました。

セミナー当日、会場には百人以上の人がつめかけています。高木さんも資料を配ったり、お茶の用意をしたりして、会場で待機していました。

林さんの一声でセミナーが始まりました。銀行側の挨拶、講師の講演、質疑応答と続きます。次々と飛び出す質問を、林さんは穏やかに的確にさばき、セミナーは時間どおり無事終了しました。

林さんの司会ぶりに感心した高木さんは、思いきつて声をかけました。

「林さん、今日の司会、すばらしかったです。堂々としていて、声もよく通っていて、明るい雰囲気です。みなさん、とても満足して、喜んで帰られましたよ」

林さんは、

「そうですか。そう言っていたらいい、



ほっとしました。皆さんに喜んでいただけるようなセミナーにしたいと思っていましたから。うれしいです。本当にありがとうございます」

と言って、深々と頭を下げました。

それから二か月ほどたったある日、高木さんは銀行の近くで、林さんのお母さんに偶然、出会いました。家が近いため、以前から知っていて会釈を交わしたことはあるのですが、話すのは初めてです。林さんのお母さんは、

「高木さん、この前のセミナーの司会を褒めてくださって、息子がすごく感謝していました。実は、あの子はあがり症で、大勢の人の前で話すのは苦手なんです。

毎晩遅くまで練習してもなかなかうまくいなくて、上司の方からもういぶん叱

られたこともあつたらしくて、当日の朝はとても緊張していました。でも、終わった後、高木さんに褒めていただいて、ちよつと自信がついたって、すごくうれしそうに話していました。今でもたまに言うんですよ。高木さんが、あのとき、ああ言ってくださったって……」

高木さんはその目を見て胸が熱くなり、あのとき、林さんに思いきって伝えて本当によかったと思いました。そして、佐野さんが励ましてくれたように、自分も人を勇気づけることができたことをうれしく思い、このような機会にめぐり会えたことに感謝しました。

この出来事をきっかけに高木さんは、周りにいる一人ひとりのよいところを見



つけて、素直に伝えることを心がけました。その人にしかない持ち味を性格の面だけでなく、その人の手法や技量ぎりょうからも幅広く探して、伝えるのです。

大人でも子どもでも、褒められて嫌いやな気持ちになる人はいません。相手が喜ぶ顔を見ると、高木さんもうれしくなり、

温かく和やかな雰囲気が周りに漂たなびうようになりました。

美点びてんや長所が見つかったら、本人にさりげなく伝えたいのですが、これが意外いがいに難しいのです。それを体得たいとくするのが、高木さんのこれからの課題です。

子どもが育つ幸せな言葉

ところで、優しく温かい言葉は、大人だけでなく、子どもにとつても必要です。いえ、子どもにこそ必要な栄養素なのかもしれません。

赤ちゃんは、おなかにいるときから親の声を聞き、乳幼児期には言葉の影響を強く受けて育ちます。

(株)益田屋専務取締役で、胎児・乳幼児期の親子の関わりの重要性を訴え、「親学会」を設立した益田晴代さんは、ご自身の体験を次のように述べています。

——私は四番目の子供（四女）の妊娠と同時に、胎児期からしっかりと子供と関

わり、心を込めて育てよう意識をして子育てをしました。長女、次女、三女のときにも、それなりに胎教を心がけましたが、それはよい音楽を聴いて、心穏やかに過ごそうというものでした。

四女るときには、「あなたの生まれてくるのを皆で待っているのよ！」と、いつもおなかの胎児に語りかけました。まだ幼い三人のお姉ちゃんがいりましたが、二人だけのときには、「あなたと私の時間よ」という言葉がけをして、おなかをさすりました。本当に効果があるのか、その時点ではわかりませんでした。ところ



が、後になって四女から、胎児期に私からとても大切にされた記憶きおくが残っている
と聞き、胎児期のコミュニケーションが
どれほど大切なことだったかを実感して
驚きました。

四女が生まれてからの乳幼児期は、「愛
している」「かわいい」「ありがとう」

「お花がきれいね」「ママはあなたが好き
よ」といった、肯定的こうじていてきで幸せな言葉を投げ
かけ、否定的ひていてきな言葉や態度に気をつけ
ました。

四女はいつも満足して、笑顔えがおいっぱい
でした。(中略)花や小鳥やそばにあるもの
に対して興味を示し、豊かな表現をし
ました。私には、このことが大きな気づ
きでした。周りにあるもの全部が、子供
の関心のあるものばかりだということが
わかりました。そういう中で親と子の絆きずな
を確認し合えたと思います。(中略)

その四女が結婚し、妊娠したとき、私
と同じように胎教じっせんを実践し、子供(孫)が
生まれました。親から愛されたという実
感じかんは本当にすごいと感じました。親に対
して安心感あんしんかんがあるので、我慢まん強く、忍耐にんたい

強い。事の成り行きを冷静に見てあわてないのです。この孫の様子を見て、私は赤ちゃんが泣くというのは不安になるから泣くのだということがよくわかりました。

孫は自分にかげられた「愛している」

「かわいい」「ありがとう」「きれい」

「大好き」という美しい言葉や肯定的な言葉を理解して、そうした温かい言葉を

たくさん使う子供に成長していきます。ですから、そばにいる人たちがすごく幸福になるのです。そして、何よりいちばん幸せを感じるのは母親自身です。ですから、幸せの種は自分で蒔いて育てていくという一言に尽きると思います。

（親学太極編・高橋史朗監修『続・親学のすすめ』

モラロジー研究所）

言葉の力で幸せの輪を広げる

胎児期には、愛情豊かな言葉をかけて、胎児としっかりコミュニケーションをとる。乳幼児期には、肯定的で美しい言葉を投げかけて絆を深める。そうすれ

ば、母親も周りの人も幸福になれるという、貴重な体験です。胎児期の記憶については、まだ研究の段階ですが、母から娘へ二代にわたって実践されているとこ

ろに説得力があります。

汚きたない言葉や人の心を傷つける残酷ざんこくな言葉を耳にすることが多い昨今、私たちも人の幸せを願う温かく優しい言葉を口にしてみてはいかががでしょうか。温かく満ち足りた気持ちになれると思います。

日本は「言こと霊たまの幸さいわいわう国こく（言霊が幸せをもたらす国）」です。言葉には霊力れいりょくが宿やどつていて、声に出して言った言葉は実現する、と古代から信じられてきました。言葉の力であなたの周りに大きな幸せの輪を広げていきましよう。

愛語よく廻天の力あり

曹洞宗そうとうしゅうをひらき、永平寺えいへいじの開祖かいそとなつた道元どうげん禅師ぜんじ（一二〇〇～一二五三年）は、「愛語あいごよく廻天かいてんの力あることを学まなすべきなり（『正法眼蔵しょうぼうげんざう』「四摂法ししよほう」）」と述べています。

「愛語」とは、人に対して慈愛じあいの心を起

こし、温かく優しい言葉をかけることで、相手のためには、時には厳しい言葉



をかけることもあります。「廻天の力」とは、天を廻す力、つまりその人の生き方を変えてしまう力、世の中を一変させる力を持っているということです。

さらに、「愛語を好むようになれば、次第に愛語を増やし、成長させていくことになる。すると、日ごろは思いもかけないような愛語もふつと表れてくるようなことがある。だから、命の続く限り、好んで愛語を言うべきである」とも述べています。

このような「愛語」を家庭や職場に広げ、家庭から学校に、さらに地域にも広げていけば、温かく親密な人間関係の輪が社会全体に広がっていきます。そして、その輪の中にいる私たちも幸せになれるのです。

